

(様式4)

令和8年3月4日

### 令和7年度 第3回 大阪市立塚本小学校 学校協議会 実施報告書

校名 大阪市立塚本小学校

校長名 森 政人

日時	令和8年3月3日(火) 19:00～	
場所	塚本小学校1階 ミーティングルーム	
出席者	委員 など	角本ひとみ(会長) 川合昌壽(委員) 中野昌樹(委員) 間 雅則(委員) 檀原光博(委員) 土井隆義(委員) 栗谷優子(委員) 佐々木健仁(委員)
	校園	森 政人(校長) 高原法子(教頭)
	区役所	櫻井 美佐恵(保健副主幹)
議題	(1) 令和7年度 運営に関する計画最終評価について (2) 令和7年度 全国体力・運動能力等調査の結果について (3) 令和7年度 大阪市学力経年調査の結果について	
協議 要旨	協議の結果	意見の概要
	(1) ○令和7年度 運営に関する計画最終評価について  承認いただいた	・「未来を切り拓く学力・体力の向上」のところで、学力経年調査の子どもたちの得点の分布はどのようになっているか？ →学年にもよるが、二極化はしておらず、正規分布に近い形になっている。そのため、指導力を上げていけば、全体的に学力も伸びてくるのではないかと考えている。  ・個々の取り組み内容は達成状況がBなのに、総括では目標値に届いていないものもあるが、どうしてなのか？ →「最も肯定的な」回答の数値を目標にしている場合、児童によっては謙遜して一つ下の「どちらかといえば」という回答を選ぶ傾向がある。そのため、「最も」と言われると目標には及ばないが、「最も」「どちらかといえば」を合わせた肯定的な回答となると、目標を超えることができている。また、それぞれの目標に対する具体的な取組については目標どおりに達成できているため、達成状況はBとしている。  ・高学年になっていくと、家庭内でも親も学習を教えられなくなっていくが、授業中に、わからないことをわからないと子どもたちは言っているか？

		<p>→最初からあきらめが入っている児童もいる。こうした児童に、どれだけ頑張りを出させるかが指導者側の力量になる。高学年になると、放課後に補習をする時間をとりづらくなるため、2年生くらいまでに基礎学力をつけていきたい。また、集中が続かない児童には声かけも必要である。</p> <p>・「安全・安心な教育の推進」の「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の質問について、最も肯定的な「思う」と回答する児童は、昨年度まで、目標の80%を超えることができていなかったが、今年度81%で超えることができた。これは、担任だけでなく、担任外や管理職も関わって一つ一つ「いじめ」対応をしてきたため、子どもたちの意識も変わってきた結果である。</p> <p>・外国籍の児童が増えている。授業中、日本語がわからないため、ただ単に座っているだけになっていることも多い。学習者用端末の翻訳機能を使っている場面があるが、端末で違うことをしていたり、正しい使い方ができていなかったりすることもある。こういった児童の対応については、学校レベルだけの対応では限界がある。</p>
(2)	<p>○令和7年度 全国体力・運動能力等調査の結果について</p> <p>○令和7年度大阪市学力経年調査の結果について</p>	<p>・全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果について、運動能力は大阪市や全国とそんなに変わりはない。しかし、20mシャトルランの結果は下回っている。これは、しんどいことに対する耐性が弱いことと関係があると思われる。粘り強く取り組むなどの目標を設定していく必要があり、子どもたちに、もう少し頑張れという機会を設けたいと学校として考えている。</p> <p>・算数に課題があることがわかったが、その改善のためにも、国語の読解力は大切である。また、読書もしてほしい。</p> <p>→今年度から、大阪市の取り組みとして、3～6年の総合的な学習の時間に、総合的読解力の学習を行っている。これを来年度以降も積み重ねていくが、今の3年生の児童が3年後どうなっているか、よく見ていきたい。また、PTAや地域の方々により、</p>
(3)		

		<p>図書の環境整備を進めていただいている。読書貯金（一年間に読んだ本の記録）の取り組みは、とてもいい取り組みだと言ってもらった。続けていきたい。</p>
協議資料	<p>○令和7年度 運営に関する計画最終評価  ○令和7年度 全国体力・運動能力等調査の結果  ○令和7年度 大阪市学力経年調査の結果</p>	
備考	傍聴者[ 0 ]名	

令和7年度 学校関係者評価報告書

大阪市立塚本小学校 学校協議会

1 総括についての評価

・総括シートの「本年度の自己評価結果の総括」は妥当であると承認いただいた。

2 年度目標ごとの評価

年度目標：**【安全・安心な教育の推進】**

- 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の質問に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を80%以上にする。
- 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。
- 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。
- 令和7年度末の児童アンケートで「学校はたのしいですか」の質問に対して肯定的に答える児童の割合を全学年85%以上にする。

・「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の質問について、最も肯定的な「思う」と回答する児童は、昨年度まで、目標の80%を超えることができていなかったが、今年度81%で超えている。これは、担任だけでなく、担任外や管理職も関わって児童の様子を見て何かあるときは一つ一つ丁寧に対応してきたため、子どもたちの意識も変わってきた結果である。学校全体で児童に向き合う真摯な姿勢は評価できる。

年度目標：**【未来を切り開く学力・体力の向上】**

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を60%以上にする。
- 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.03ポイント向上させる。
- 小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を80%以上にする。
- 小学校学力経年調査における「理科の授業の内容はよくわかりますか。」に対して最も肯定的な「当てはまる」もしくは「どちらかといえば当てはまる」と回答する児童の割合を65%以上にする。

・学力経年調査の子どもたちの得点の分布は、学年にもよるが、二極化はしておらず、正規分布に近い形になっている。そのため、指導力を上げていけば、全体的に学力も伸びてくるので

はないかと考える。今後の学校としての教員の指導力向上に期待する。

・個々の取り組み内容は達成状況が B なのに、総括では目標値に届いていないものもあるが、「最も肯定的な」回答の数値を目標にしている場合、児童によっては謙遜して一つ下の「どちらかといえば」という回答を選ぶ傾向がある。そのため、「最も」と言われると目標には及ばないが、「最も」「どちらかといえば」を合わせた肯定的な回答となると、目標を超えることができている。また、それぞれの目標に対する具体的な取組については目標どおりに達成できているため、達成状況の B は妥当である。

・高学年になっていくと、家庭内でも親も学習を教えられなくなるくらい学習内容が難しくなる。最初からあきらめが入っている児童もいる。こうした児童に、どれだけ頑張りを出させるかが指導者側の力量になる。高学年になると、放課後に補習をする時間をとりづらくなるため、2年生くらいまでに基礎学力をつけていきたい。また、集中が続かない児童には声かけも必要である。

年度目標：【**学びを支える教育環境の充実**】

○授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。(ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く)  
○ゆとりの日を週1回設定する。

・学習者用端末を活用することが定着化していることはわかったが、その使い方については、指導が必要ではないかと思う。学習者用端末で YouTube を見る方法を調べるなど、子どもたちが学習以外のことをしようと抜け道を探ったりしている様子がある。児童のよりよい端末使用についての指導を期待する。

・外国籍の児童が増えている。授業中、日本語がわからないため、ただ単に座っているだけになっていることも多い。学習者用端末の翻訳機能を使っている場面があるが、端末で違うことをしていたり、正しい使い方ができていなかったりすることもある。こういった児童の対応については、学校レベルだけの対応では限界がある。今後、更なる行政レベルでの対応の充実を

検討していただきたい。

### 3 今後の学校園の運営についての意見

・学校長から、子どもたちに自分で物事を解決する力をつけていきたいという話をされた。子どものことを心配するあまり、保護者が何でも先回りしてやってしまう傾向がある。トラブルが起こったときも、それを学びに変えていくような考えを、保護者にももってもらいたい。そして、学校・保護者・地域が同じ思いで子どもたちを育ていけるようにしてい